

聖書日課 『からし種』 2023.8.27-9.3

<p>8月27日 (日)</p> <p>Ⅱ 歴代 32章</p>	<p>「敵には人の力しかないが、我々には我々の神、主がいて助けとなり、我々のために戦ってくださる」(8節)。他国に連戦連勝中のアッシリア軍が「我らの神にひれ伏せ！」と脅した時、ヒゼキヤは主告白をもって抵抗した。私たちに「ひれ伏せ！」と迫る偽りの神々の声があふれる世界の中で、主の日の今日、十字架の主を告白する賛美を共にささげよう。</p>
<p>28日 (月)</p> <p>Ⅱ 歴代 33章</p>	<p>「こうしてマナセは主が神であることを知った」(13節)。マナセ王が「主が神であることを知った」のは、アッシリアに敗れてバビロンに連行された後、奇跡的にエルサレムへの帰還が許された時だった。人は手痛い失敗をし、自分の過ちを思い知れないと主に立ち帰ることができない。私たちの罪深さにも関わらず、今日慈しみを注いでくださる「主を知る者」とされて。</p>
<p>29日 (火)</p> <p>Ⅱ 歴代 34章</p>	<p>「王は…こう命じた。『…わたしのため、イスラエルとユダに残っている者のために、主の御旨を尋ねに行け』」(20-21節)。ヨシヤ王は父マナセの多くの罪と背信、また主への立ち帰りを目の当たりにする中で、主なる神の神殿と礼拝を整える大切さを知らされていく。主に立ち帰る大切さに気づかされた時に、躊躇なく「主の御旨」を第一に尋ねる者とされて。</p>
<p>30日 (水)</p> <p>Ⅱ 歴代 35章</p>	<p>「兄弟であるレビ人が彼らのために準備してくれたので、彼らの中のだれも、自分の奉仕を離れる必要がなかった」(15節)。毎日の神殿礼拝を整えるため、祭司とレビ人たちは各自の持ち場を誠実に担う必要があった。礼拝は一人の祭司の業ではなく、門衛、詠唱者、犠牲を取り扱う祭司、一人ひとりが礼拝者として自分をささげていくところに成立する。</p>

メール配信登録メール senfkorn.obc@gmail.com

メール配信希望の方は名前とアドレスを明記の上、上記のアドレスまで

聖書日課 『からし種』 2023.8.27-9.3

<p>31日 (木)</p> <p>Ⅱ 歴代 36章</p>	<p>「こうして主がエレミヤの口を通して告げられた言葉が実現し、この地はついに安息を取り戻した」(21節)。バビロン捕囚によりイスラエルの人々が「神の約束の地」を失った時、「地はついに安息を取り戻した」との言葉に胸を刺される。昨今の気候変動において、私たちが地球に大きな負担をかけている罪をどのように考え担っていくことができるのだろうか。</p>
<p>9月1日 (金)</p> <p>エズラ記 1章</p>	<p>「主はかつてエレミヤの口によって約束されたことを成就するため、ペルシアの王キュロスの心を動かされた」(1節)。エレミヤの預言は、バビロン捕囚という「苦難」を通して「将来と希望を与える平和の約束」であり、人々の思いを超えた「神の業」(キュロスを用いる)を体験する約束であった。復活の主の「あなたがたに平安を与える」との約束を心に刻んで。</p>
<p>2日 (土)</p> <p>エズラ記 2章</p>	<p>「彼らは…バビロンに連行されたが、それぞれエルサレムとユダにある自分の町に帰った者たちである」(1節)。エズラ記は「帰還した捕囚の民」の確認から始める。バビロンに連行されたのは約1万人(列王記下 24 章)であったが、捕囚の間にも民の数は増え4万2360人(64節)が帰還の恵みにあずかった。捕囚の苦難の中にも主は共に歩まれたのである。</p>
<p>3日 (日)</p> <p>エズラ記 3章</p>	<p>「二十歳以上のレビ人を主の神殿の工事の指揮に当たらせられた」(8節)。エルサレムに帰還したゼルバベルとイエシュアは祭司とレビ人と共に神殿再建の基礎工事に取りかかる。その工事の指揮を二十歳以上のレビ人にさせた。礼拝の再開でも指揮をとり、この工事でも主導となるレビ人の働きは重要であった。現在でも礼拝に関わる働き人を覚えたい。</p>